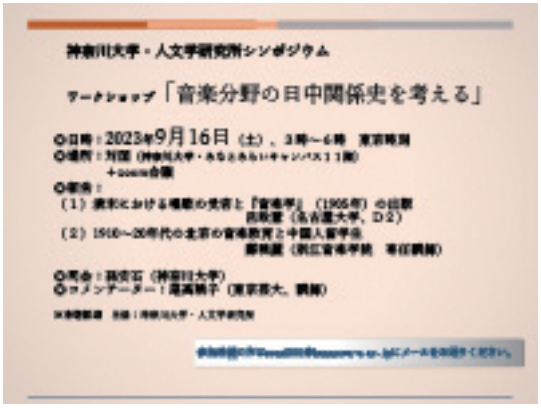
ニューズレター（第 4 号　2024 年 3 月 1 日発行）

2023 年度前期人文学研究所シンポジウム報告

「音楽分野の日中関係史を考える」開催報告

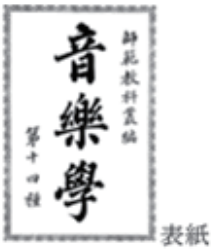
共同研究グループ「日中関係史」

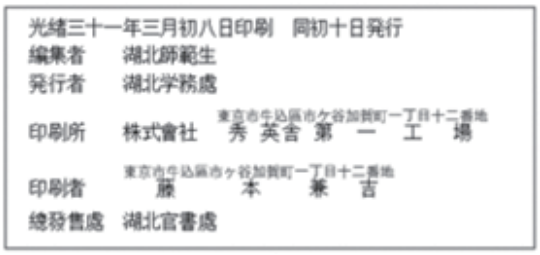


開催日：2023 年 9 月 16 日（土）
会　場：みなとみらいキャンパス　11 階（オンラインあり）
報　告：
1. 清末における唱歌の受容と『音楽学』（1905 年）の出版」呂政慧（名古屋大学，D2 年）
2. 「1910～20 年代の北京の音楽教育と中国人留学生」鄭暁麗（浙江音楽学院，専任講師）

司　会：孫安石（神奈川大学）
コメンテーター：尾高暁子（東京芸大，講師）

呂氏の報告は，清朝末期の中国湖北省師範留学生が編纂した音楽教科書『音楽学』（1905 年）を取り上げ，近代における歌の越境をめぐる受容と変容の問題を論じるもので，（1）『音楽学』の出版情報から見る日本との関係，（2）『音楽学』の下編の唱歌から見た近代唱歌の受容関係，（3）『音楽学』の唱歌と参照した日本の唱歌の比較から見た異同について報告する内容であった。





（呂政慧氏の報告資料より）

鄭氏の報告は，台湾出身の柯政和が 1911 年からの日本留学をへて，1920 年代に入り北京の音楽界で教員，雑誌の発行，演奏会の設定など様々な活動を行った内容を，（1）日本留学の経験，（2）1920 年代年代の北京音楽界，（3）北京師範大学での音楽教育活動，（4）西楽社・北京愛美楽社の創立と演奏会の開催，（5）『新楽潮』の創刊と『音楽雑誌』への寄稿，（6）中華楽社の設立と音楽出版，（7）中国在住の日本人・日本組織との関わりに分けて報告する内容であった。

図 3：『新楽潮』創刊号表紙

図 4：『新楽潮』1928 年第 2 巻第 2 期表紙

（鄭暁麗氏の報告資料より）

コメンテーターの尾高氏を交えた質疑応答の時間では，中国での「ぴょんこ節」唱歌の受容について，歌詞を完全に入れ替えた唱歌が意味するものについて（以上，呂氏の報告），台湾人の柯政和が北京で活躍したことの意味や外務省外交史料館所蔵の柯政和資料（以上，鄭氏の報告）について活発な意見交換があった。

オンラインを併用した本研究会は対面参加 13 名＋zoom 参加 22 名の合計 35 名の参加があり，本学の教員，学生はもちろん，上海，北京，広島などの幅広い分野の専門家の参加を得ることができた。ご支援いただいた人文学研究所のみなさまに深く感謝申しあげます。

文責　孫安石（日中関係史共同研究代表）

会場の写真 1

会場の写真 2

講演会報告（1）

木川剛志氏（ドキュメンタリー監督・観光映像専門家・日本国際観光映像祭代表・和歌山大学観光学部教授）「観光映像からドキュメンタリーまで ── Yokosuka 1953 横浜上映記念講演 ──」

国際日本学部准教授　崔瑛

開催日：2023 年 11 月 16 日（木）
会　場：みなとみらいキャンパス　米田吉盛記念ホール

木川剛志監督のドキュメンタリー作品「Yokosuka 1953」の横浜での上映にあわせ，作品の背景となる横須賀・横浜の戦後の混乱期の状況や関連する人物の人生について説明がなされた。この説明は，観客の作品への理解を深め，好奇心を刺激する内容だった。また，木川氏が専門とする観光映像に関するセッションもあり，彼が代表を務める日本国際観光映像祭についての紹介と共に，観光映像の評価基準についての解説が行われた。実際の作品例を紹介し，参加者からは好意的なコメントが寄せられた。

質疑応答のセクションでは，「Yokosuka1953」の主人公と同じ年代の横須賀市民から映画に関する感想が述べられ，映画や講演会への市民の反応を把握する貴重な機会となった。さらに，読売新聞社やタウンニュースの記者も出席し，記者らからの質疑も受けることができた。11 月 18 日土曜日の読売新聞朝刊の地域欄記事として本学での講演会が紹介された。また，当日出席したタウンニュース記者によって Yokosuka 1953 の上映に関する記事が紹介された。映画への深い理解を促すだけでなく，地域コミュニティとのつながりを強化する機会となった。

ドキュメンタリー映画　Yokosuka 1953～GI ベビー，ルーツ探る旅～
【タウンニュース　横須賀版】

会場の様子

講演会報告（2）

トリスタン・グルーノ氏（名古屋大学人文学研究科准教授）「Tokyo Station and the Building of Japanese Imperial Urban Space」

国際日本学部准教授　ティネッロ・マルコ

開催日：2023 年 11 月 22 日（水）
会　場：みなとみらいキャンパス　5030 室（オンラインあり）

Tokyo Station opened to great fanfare in 1914 with a ceremony that doubled as a celebration of the expanding empire. Tokyo mayor Sakatani Yoshirō applauded the station building rising before them, proclaiming that it “tastefully prostrates itself before the solemn nobility of the nearby imperial palace” with a grandeur that made it the “pride of the imperial capital（Teito）.” Tokyo Station, then, capped a space of both emperor and empire at the heart of the city, mediating Japan’s aspirations as a first-class world power as much as Tokyo’s status as the metropolis of an overseas empire.

Like Tokyo Station itself, Tokyo’s reputation as the “Imperial Capital” took several decades to emerge. This talk revisited the contested planning of Tokyo Station to retrace how popular conceptions of both the station and the city changed over the Meiji Period and clarified how the evolving design of Tokyo Station manifested not only an emerging consensus about Tokyo’s status as the imperial capital, but also the incipient Japanese nation and empire in the Meiji Period.

講演会報告（3）

見城悌治氏（千葉大学　国際教養学部教授）「川島真氏，孫安石氏に対するコメントと報告」

外国語学部教授　孫安石

開催日：2023 年 12 月 9 日（土）
会　場：みなとみらいキャンパス　米田吉盛記念ホール

2023 年 12 月 9 日（土）に開催された「関東大震災の研究についての報告＆討論会 ── 非文字資料と歴史」は，非文字資料研究センターの研究班と人文学研究所の「日中関係史研究班」が共同で開催した講演会で，第 2 部では，報告 1「関東大震災における中国人虐殺事件 ── 国際労働力移動の観点から見る」川島真（東京大学），報告 2「関東大震災と中国人留学生」孫安石（神奈川大学），報告 3「川島真氏，孫安石氏に対するコメントと報告」見城悌治（千葉大学）が行われた。とくに，見城報告では，(1) 自然災害をめぐる日本と中国の二国間（または，国際間）の間では，軋轢と拮抗だけではなく，「共助」という場面があったのではないか，(2) 同じ脈絡で，日華学会の中国人留学生支援なども 1920，30 年代という時代的な制約のなかで，支援と「管理」という両側面があったことが評価されても良いのではないか，という論点が提示され，活発な討論となった。

調査研究報告（1）

地方における現代美術の調査（丸亀市猪熊弦一郎現代美術館，豊島美術館，道後温泉地区）

国際日本学部教授　松本和也

丸亀市猪熊弦一郎現代美術館では企画展「中園孔二　ソウルメイト」展を閲覧・調査した。瀬戸内海沖で消息不明となった夭折の画家・中園ゆかりの地で，複数のレイヤーから構成された絵画の多彩な表層にくわえ，それを手がかりとした向こう側の「何か」とこちら側の画家のイメージを感じ取ることができた。豊島美術館では，土地の歴史，風土と一体化した美術館建築までのプロセス，立地を如実に体感しながら，実際に体験しなければわからないと言われる，一作品だけのための美術館の内実にふれることができた。建築家・西沢立衛による天井に 2 つの大きな穴をうがった水滴のような流線型の空間内に，アーティスト・内藤礼による《母型》が展示されている。見上げれば，天井からは借景よろしく空と山が見え，足下では，わきでる水が微細な動きを積み重ねて「泉」をなしていく。独特な時間の流れ

が，島の自然を取り込みながら成立していた。道後温泉地区では「道後アート 2023」として，街の雰囲気にあわせた多彩なインスタレーションが展開されていた。

猪熊弦一郎現代美術館

豊島美術館

道後アート 2023

調査研究報告（2）

大阪と京都の出張報告

国際日本学部教授　尹亭仁

12 月 1 日（金）～3 日（日）の 2 泊 3 日，大阪と京都に出張した。韓国語の授業で取り組んでいる「参加誘導型視覚教材」における韓国語の言語景観を充実させ，学生たちに「多言語表示サービス施設」の情報をより具体的に提供する必要があったからである。

初日の 12 月 1 日は新大阪駅および大阪駅周辺で多言語表示の調査を行なった。新幹線が走る新大阪駅より在来線の大阪駅周辺に韓国語表示が多く，観光に来ている韓国人も多かった。2023 年現在，日本を訪れる訪日外客は韓国人が最も多いことを実感した。

JR で大阪駅から鶴橋駅まで移動したが，電車の中の電光掲示板に多言語表示が流れていた。10 年ぶ

りに訪れた鶴橋には比べ物にならないほど韓国料理屋が増えていたが，韓国料理名が韓国語で提示される店よりカタカナで提示される店が多かった（図 1）。ある店のオーナーに聞いたところ，コロナが明けてから，訪れるお客さんが増え，特に週末は混むほどであると答えた。平日であるにも関わらず，中年の女性客が多かった。

大阪歴史博物館の場合，今まで見てきた多くの「多言語表示サービス施設」と違って韓国語が中国語より先に表示されていた（図 2・図 3）。ところどころ，日・英・中・韓の 4 言語表示も見られたが，多くの表示に韓国語が先である特徴が見られ，筆者が主張している「近隣性」を確かめることができた。何より，全体的に韓国語表示が充実していたので，学生たちの野外学習地としては「優良多言語表示サービス施設」と言える。大阪城にも多くの韓国語サービスが見られた。

図 1　大阪鶴橋

図 2・図 3　大阪歴史博物館の韓国語

図 4　大阪城の韓国語

2日目には京都駅周辺の調査をしてから，京都で最も混むと言われる清水寺を訪れ，京都のオーバーツーリズムの現状を目にした（図5）。韓国語と中国語は案内と禁止表示に一部見られた。

図5　清水寺とオーバーツーリズム

京都国立博物館では多くの作品の解説に多言語サービスが提供されていたが，撮影禁止であった。韓国語の翻訳のレベルは高かったが，直訳による誤訳も目に付いた（図6・図7・図8）。

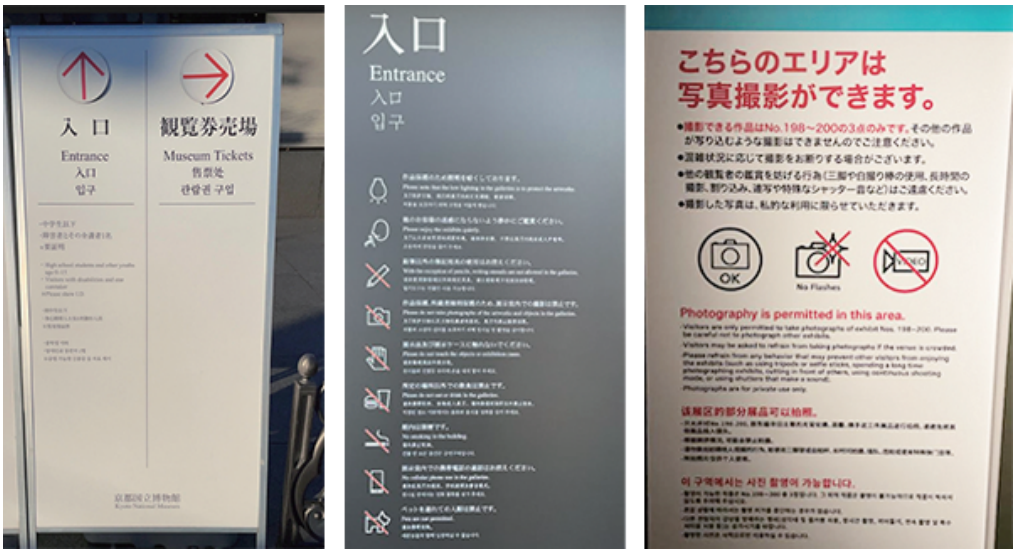


図6・7・8　京都国立博物館の多言語表示と韓国語

3 日目は本学との比較のため，大阪大学豊中キャンパスを訪れた。英語表示は見られたが，韓国語と中国語の表示はなかったため，その理由を確かめる必要があると考えた（図 9）。その後訪れた阪急デパートでは横浜のデパートでは見たことのない充実した多言語表示を見ることができた（図 10・図 11）。特にフロアーガイドは韓国語の授業でも活用できるようなものであったため，資料として韓国語の教員同士で共有することにした。今回の大阪・京都の調査資料に基づいて首都圏の多言語サービスと比較を試みたい。

図 9　大阪大学の 2 言語表示

図 10・図 11　阪急デパートの多言語表示と韓国語